

小学生の悩みと相談に対する意識

春日 由美・小野 陽子^{*1}・佐竹 圭介・田中亜矢巳

The Worries and Concerns of Elementary School Students and Their Attitudes Towards Consultation

KASUGA Yumi, ONO Yoko^{*1}, SATAKE Keisuke, TANAKA Ayami

(Received October 21, 2024)

キーワード：小学生、悩み、相談、アンケート

はじめに

現在、子どもたちを取り巻く課題は多岐にわたり、いじめや不登校、暴力行為や虐待等の課題に対し、学校現場では日々教職員が、保護者や校外の専門機関とも連携を取りながら、子どもたちの成長を支えている。一方で、近年小学生（以下、「児童」と記す）における課題が特に顕著に見られるようになってきた。文部科学省（2023）によると、いじめの認知件数は小学校が最も多く、また近年急激に増加している。暴力行為の発生件数も平成30年度に小学校が中学校を上回り、令和4年度（61,455件）は平成26年度（11,472件）に比べ5倍以上となった。そして、不登校児童数も、平成30年以降増加し続けている。このような課題を抱える児童だけでなく、表面的には課題を抱えていないように見える児童も、小学校6年間の急激な心身の変化を体験しながら、家庭や学校、塾や習い事、親や教員、友達や同級生、近所の子どもや大人との関わりなど、複数の場所での生活や多くの人との関わりの中で、目まぐるしい日々を送り、その中で悩みや困りごとを抱える場合もあることが推測される。

佐藤・渡邊（2013）の小学校4年生～6年生対象の調査では、男子の28.3%、女子の45.4%が悩みを抱えていたことが報告されている。また、内閣府（2023）の子どもや若者を対象とした調査では、落ち込んだ経験が「あった（または、現在ある）」「どちらかといえば、あった（ある）」を選択した割合が10歳では59.0%、11歳では64.2%であった。そして、学研教育総合研究所（2023）の小学校1年生～6年生を対象とした調査では、学年や性別によるばらつきはあるが、3割～4割の児童が「悩みがある」と回答している。同調査で、悩みの種類は「学校での友達関係」や「学習に関すること」（複数選択可で全学年平均がそれぞれ15.8%と14.8%）が他と比べて多く、「悩み事が特にない」を選択した児童も58.4%いることが報告されている。これらから、男女や年齢（学年）によるばらつきはあるが、悩みを抱えない児童もいる一方で、児童が悩みを抱えることも珍しくないと考えられる。

それでは、児童は悩みや困ったことがある際に、相談をするのだろうか。また相談するとすれば、誰に相談をするのだろうか。学研教育総合研究所（2023）の小学校1年生～6年生を対象とした調査では、相談相手として母親が選択される割合が多く（複数選択可で全学年平均は76.4%）、次いで父親（35.7%）、友達（21.4%）が選択されていた。また、佐藤・渡邊（2013）の小学校4年生～6年生を対象とした調査では、援助要請を行った対象は保護者が最も多く、次いで友達、担任であった。そして西尾（2024）が小学校5年生から中学校2年生を対象に行った調査では、悩みの相談相手に母親が挙げられる割合が多く、学年が上がるにつれて友人が挙げられる割合が増加していたことが報告されている。また、内閣府（2023）の子どもや若者を対象とした調査では、落ち込んだ時の相談相手として（複数選択可）、10歳では家族や親せきが78.9%、学校の友だちが72.2%、学校の先生が28.8%選択され、11歳では家族や親せきが79.5%、学校の友だちが76.7%、学校の先生が37.2%選択されていた。これらから、児童にとって、母親や父親といった家族が相談しやすい相手であり、友達や教員も相談する対象になる場合があると考えられる。

*1 山口県周南市立今宿小学校

このように、児童は悩みがある場合、家族など身近な他者に相談することが考えられるが、先述の学研教育総合研究所（2023）の調査では、9割の児童が困った際に誰かに相談する一方、1割の児童は誰にも相談しないことも報告されている。また内閣府（2023）の調査では、家族・親せきにおいて何でも悩みを相談できる人がいるかとの質問に、「そう思う」「どちらかといえば、そう思う」と回答したのは、10歳で90.4%、11歳で88.9%であったが、「どちらかといえば、そう思わない」「そう思わない」と回答したのが10歳で9.6%、11歳で10.5%あった。つまり、多くの児童は悩みがある場合、家族などの身近な他者に相談することが考えられるが、1割程度は他者に相談しない可能性が考えられる。鈴木・中山（2020）は小学校6年生を対象とした調査から、ネットを通じて知らない人と会ったりコミュニケーションした経験がある者は、悩みがある時に両親を相談相手として選択しないと回答することが多かったことを報告している。児童が悩んだ際に、ネットを通じて安易に知らない他者に繋がることを防ぐために、身近な他者に相談しない背景を明らかにすることは必要と考えられる。

他方、児童が他者に相談しようと思わない背景についての検討もわずかであるが行われている。先述の内閣府（2023）の調査では、落ち込んだ時に誰にも相談しようと思わないと回答した者（10歳は271名中13名、11歳は352名中10名）に理由を尋ねており、10歳では53.8%が「自分ひとりで解決するべきだと思うから」、46.2%が「相談しても解決できないと思うから」と「誰にも知られたくないことだから」を選択し、11歳では60.0%が「自分ひとりで解決するべきだと思うから」、40.0%が「相談しても解決できないと思うから」を選択したことが報告されている。また菊池・山本（2021）は、小学校4年生～6年生を対象とした調査から、小学生の援助要請行動を阻害する要因について因子分析を行い、「評価への懸念」（相談することでの他者からの評価が気にかかり不安になることに関する因子）、「対象への不信」（相談相手を信じられず、裏切られることへの不安に関する因子）、「自立への固執」（他人に頼らず自分で解決すべきという考えに強いこだわりがあることに関する因子）の3因子を確認している。これらから、児童が相談しようと思わない理由には、自分で解決したいというポジティブな場合や、他者からの評価懸念や他者への不信などの他者へのネガティブな感情がある場合、解決を期待できないと思うといった諦めがある場合が考えられる。

上記のように、児童の悩みや相談相手、相談しない場合の背景について検討したものもいくつか見られるが、佐藤・渡邊（2013）も指摘するように、子どもを対象とした援助要請行動の研究対象のほとんどが中学生であり、小学生対象の研究は未だ少ない。さらに、本田・永井（2024）の児童期の援助要請研究に関するレビューからも、日本における小学生を対象とした研究は小学校4年生以降を対象としたものに偏っていることがうかがわれる。このように小学生、特に低学年の悩みや相談相手、相談しない場合の背景について、児童の実態が十分につかめているとは言い難い。

ところで現在、児童の悩みや学校適応を把握する目的で、日常的に各学校においてアンケートが実施されることも少なくない。また、いじめの日常的な実態把握を目的としたアンケートが実施されることもある（文部科学省、2015）。そしてこれらの回答結果が、児童との定期的な教育相談の面談や、いじめの指導に活用されることも少なくなく、アンケートは児童の実態を捉える手段として捉えられている。一方で、先に概観したように、悩みがあっても相談しない児童がいることから、悩みやいじめがあっても、これらのアンケートに記載していない場合も考えられ、児童の実態が十分に捉えられていない可能性も考えられる。

以上のことから本研究では、小学校低学年から高学年の児童における悩みや相談に関する基礎的資料を得ることを目的とする。具体的には、小学生を対象に、悩みの種類、相談相手、相談しない場合の理由、学校で行われるアンケートへの記載の有無や、記載する場合としない場合の理由について質問紙による調査を行い検討する。

1. 方法

1-1 調査方法と研究協力者

調査は公立小学校1校において、自記式質問紙で2021年1月に行った。第2著者が調査について校長の承諾を得た後、全教職員に研究目的、内容、方法、フィードバック等について説明を行い、各学級担任に児童への質問紙の配布と調査実施の協力を依頼した。各学級で同様に調査を実施するため、第2著者が調査方法のマニュアルを作成し、それを基に各学級において調査を実施してもらった。調査用紙には、名前は記載し

ないこと、書きたくないことは書かなくてよいことを明記した。回答をもって研究協力に同意したものとみなした。4項目以上の欠損値のあるものを除いた616名分を分析に用いた（1年生101名、2年生85名、3年生91名、4年生112名、5年生107名、6年生120名）。

1-2 調査項目

調査項目は第2著者が、茨城県教育研修センター（2001）および佐藤・渡邊（2013）を参考にして作成し、当該学校の校長や教員に複数回相談を行い、第1著者と共に項目の修正を行った。また、実際に1年生～3年生の児童が回答することが可能かを確認するため、調査を行う小学校とは別の小学校に在籍する1年生、2年生、3年生各1名に、第1著者が調査内容や記載方法について複数回確認し、それを基に第2著者が1年生～3年生用の質問紙の修正（自由記述式での回答から選択式への回答方法の変更等）を行った。1年生～3年生と4年生～6年生の質問紙は一部別の内容とし、1年生～3年生は以下の1)～4)を、4年生～6年生は1)～3)、および5)～6)の項目とし、全ての学年の質問紙について漢字にはルビを振った。また、1年生～3年生の調査用紙はひらがなを多用するなど読みやすくした。なお、1年生～3年生では「書く理由」は、回答数の多さによる負担を考慮し、尋ねなかった。

1) 内容ごとの悩みの有無：「勉強」「運動」「友だち」「先生」「家族」「自分の健康」「進路や将来」のそれぞれについて、困ったり悩んだりしたことの有無について、「はい」「いいえ」のいずれかを選択してもらった。なお、1年生～3年生は進路や将来の項目は含めなかった。

2) 相談相手：困ったり悩んだり嫌なことがあった時の相談相手について、「お母さん」「お父さん」「きょうだい」「担任」「担任以外の先生」「習い事の先生」「友だち」「誰にも話さない（相談しない）」「その他の人」から選択してもらった（複数回答可）。

3) 通常の学校アンケートへの記載の有無：困ったり、悩んだり、嫌なことがあった時に、児童の悩みを把握するために定期的に実施されている学校アンケートに記載するかについて、「書く」「書かない」のいずれかを選択してもらった。

4) 学校アンケートに書かない理由：3)で「書かない」を選んだ場合に、書かない理由を選択肢12項目（「書くことが恥ずかしいから」など）から選択してもらった（複数選択可）。

5) 学校アンケートに書く理由：3)で「書く」を選んだ場合に、書く理由を自由記述で記載してもらった。

6) 学校アンケートに書かない理由：3)で「書かない」を選んだ場合に、書かない理由を自由記述で記載してもらった。

2. 結果

2-1 内容ごとの悩み

各内容について困ったり、悩んだことがあるかについて、「はい」と答えた人数を表1に示す。1年生、2年生、4年生、5年生では、「勉強」の悩みが最も多く選択された。3年生では「友達」が最も多く選択され、6年生では「進路・将来」が最も多く選択された。

表1 各項目の選択人数（学年内での％）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
勉強	14(13.9)	8(9.4)	16(17.6)	22(19.6)	30(28.0)	17(14.2)
運動	7(6.9)	2(2.4)	5(5.5)	7(6.3)	14(13.1)	12(10.0)
友達	9(8.9)	3(3.5)	22(24.2)	13(11.6)	23(21.5)	15(12.5)
先生	2(2.0)	0(0.0)	4(4.4)	5(4.5)	6(5.6)	7(5.8)
家族	8(7.9)	1(1.2)	6(6.6)	11(9.8)	4(3.7)	6(5.0)
自分の健康	9(8.9)	3(3.5)	6(6.6)	9(8.0)	11(10.3)	10(8.3)
進路・将来				13(11.6)	25(23.4)	21(17.5)

2-2 相談相手

各相談相手について、選択した人数を表2に示す。いずれの学年も「母」が最も多く、7割から8割が選択していた。「父」も1年生や2年生では6割前後の児童が選択し、3年生～6年生においても4割前後の児童

が選択していた。また、いずれの学年も「きょうだい」を2割から3割の児童が選択していた。「担任」を選択する割合は学年が上がるにつれて少なくなり、逆に「友達」を選択する割合は学年が上がるにつれて多くなっていた。また、その他として書かれたものは、祖父母が多く、いとこや親せきなどが書かれていた。

表2 各相談相手の選択人数（学年内での％）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
母	86(85.1)	75(88.2)	72(79.1)	86(76.8)	86(80.4)	96(80.0)
父	60(59.4)	52(61.2)	36(49.6)	46(41.1)	41(38.3)	56(46.7)
きょうだい	34(33.7)	23(27.1)	22(24.2)	26(23.2)	25(23.4)	30(25.0)
担任	65(74.4)	46(54.1)	47(51.6)	49(43.8)	46(43.0)	34(28.3)
担任以外の教員	12(11.9)	1(1.2)	1(1.1)	3(2.7)	1(0.9)	3(2.5)
習い事の先生	24(23.8)	7(8.2)	9(9.9)	5(4.5)	4(3.7)	8(6.7)
友達	33(32.7)	31(36.5)	43(47.3)	54(48.2)	64(59.8)	73(60.8)
その他	20(19.8)	8(9.4)	10(11.0)	8(7.1)	11(10.3)	6(5.0)
誰にも話さない	10(9.9)	8(9.4)	12(13.2)	19(17.0)	24(22.4)	20(16.7)

注：「その他」に記載されたものは、1年生は祖父母（9名）、いとこ（2名）、児童クラブの先生（2名）、保育所職員（1名）、習い事の先生（1名）、個人名（1名）、2年生は祖父母（4名）、トラブルのあった子どもの母（1名）、3年生は祖父母（5名）、友達やその親（2名）、いない（1名）、4年生は祖父母（7名）、ペット（1名）、5年年生は祖父母（3名）、いとこや親せき（3名）、近所の人（1名）、相談のサイト（1名）、ネットの友達（1名）であった。

2-3 学校アンケートへの記載

通常の学校アンケートへの記載について「書く」「書かない」それぞれの選択人数を表3に示す。低学年の方が中学年や高学年より「書く」を選択した割合が高く、6年生は最も少なかった。逆に「書かない」を選択した割合は、低学年よりも高学年が多く、6年生は最も多かった。

表3 学校アンケートへの記載の選択人数（学年内での％）

	1年生	2年生	3年生	4年生	5年生	6年生
書く	54(52.5)	52(61.2)	42(46.2)	50(44.6)	46(43.0)	43(35.8)
書かない	45(44.6)	31(36.5)	45(49.5)	62(55.4)	57(53.3)	76(63.3)

注：書く・書かない共に未記入の児童が1年生3名、2年は2名、3年は2名であり、書く・書かない共に記入した児童が3年が2名、5年生が4名、6年生1名であった。

2-4 学校アンケートに書かない理由（1年生～3年生）

通常の学校アンケートへの記載について「書かない」理由のそれぞれの選択人数を表4に示す。1年生～3年生のいずれの学年でも最も選択が多かったのは、「困ったことがない」であった。次いで1年生は「友達にアンケートを見られるのが嫌」「自分で解決する」「困ったらすぐに先生に言っている」、2年生は「困ったらすぐに先生に言っている」、3年生は「恥ずかしい」が多かった。

表4 学校アンケートに書かない理由の選択人数（学年内での％）

	1年生	2年生	3年生
恥ずかしい	11(10.9)	5(5.9)	13(14.3)
めんどろ	7(6.9)	2(2.4)	3(3.3)
困ったことがない	26(25.7)	22(25.9)	15(16.5)
自分で解決する	18(17.8)	6(7.1)	11(12.1)
先生に話したくない	4(4.0)	3(3.5)	6(6.6)
先生に呼ばれるのが嫌	8(7.9)	3(3.5)	6(6.6)
困ったらすぐに先生に言っている	16(15.8)	17(20.0)	6(6.6)
先生に呼ばれるのが恥ずかしい	5(5.0)	0(0.0)	10(11.0)
友達から先生につげぐちしていると思われるのが嫌	9(8.9)	3(3.5)	10(11.0)
書いても困ったことがなくならない	14(13.9)	1(1.2)	8(8.8)
友達にアンケートを見られるのが嫌	19(18.8)	2(2.4)	10(11.0)
その他	4(4.0)	2(2.4)	11(12.1)

注：「その他」に記載されたものは、1年生は「お母さんと友達に言うから」「そのことを思い出して、そのことがだんだん恥ずかしくなるから」「どきどきするから」、2年生は「こわいから言えない」「友達が悲しそう」、3年生は「お母さんに相談するから」「その友達が僕のことを嫌いになるから」「解決できないのがあると問題になるから」「言葉がまとまらず言えない」「友達に嫌と思われたくないから」「友達に嫌な思いをさせたくないから」などがあつた。

2-5 学校アンケートに書く理由・書かない理由（4年生～6年生）

通常の学校アンケートに「書く理由」「書かない理由」について、各学年ごとにKJ法（安藤，2004；川喜田，2017）を援用し、カテゴリー化を行った。まず第2著者が1つの意味のある文章のまとまりを単位として区切り、カードを作成した。その後、第1著者と臨床心理学を専攻する大学院生2名により、内容の類似からサブカテゴリー（以下＜＞で表記）に分類し、それらをさらにカテゴリー（以下【】で表記）に分類した。その後、分類の妥当性を第1著者と第3著者および第4著者で協議し、合意により修正を行い、カテゴリーとサブカテゴリーを決定した（表5～表10。表中の括弧内の数は記述数）。

表5のように、4年生の書く理由は、【変化への期待】（＜問題の解決＞＜不快感の解消＞）、【他者との共有】（＜他者との共有＞）、【当然という思考】（＜当然という思考＞）、【他者からの影響】（＜他者からの影響＞）、【学校内での解決】（＜学校内での解決＞）に分類され、【変化への期待】の記述数が最も多く、次いで【他者との共有】が多かった。

表5 学校アンケートに書く理由（4年生）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一部
【変化への期待】(35)	＜問題の解決＞(18)	書かないと悩みごとが解決できないから／先生に言うのと解決できるから／自分で解決できないから／困ったままでもいいから
	＜不快感の解消＞(17)	ずっともやもやしてるのは嫌だから／先生にすぐ話して嫌な気持ちを取りたいから／書かないだったら、心の中とかが離れないし、嫌な気持ちがずーと続くから／先生に伝わらずにずっと嫌な思いをするのは嫌だから／書いて話を聞いてもらった方が気が楽になる
【他者との共有】(10)	＜他者との共有＞(10)	書いて分かってもらえる方がいい／アンケートに書く先生に言えるから／自分の悩みを聞いてもらいたい／自分一人で悩んだりしたくないから
【当然という思考】(4)	＜当然という思考＞(4)	悩み事はきちんと書いた方がいい／大人の人や先生に相談した方がいいから
【他者からの影響】(2)	＜他者からの影響＞(2)	お母さんに言っても学校のことから先生に言ってもと言われるから／お母さんに「一人で悩まず周りにも相談してね。」と言われたから
【学校内での解決】(1)	＜学校内での解決＞(1)	書かなくて、学校のことで困っていたら、お家の人ではできない部分もあるかもしれないから

注：その他として、「前、書いた」という記述が1つあった。

表6のように、5年生の書く理由は、【変化への期待】（＜問題の解決＞＜不快感の解消＞）、【当然という思考】（＜当然という思考＞）、【アンケートのメリット】（＜アンケートのメリット＞）、【他者との共有】（＜他者との共有＞）に分類され、【変化への期待】の記述数が最も多く、次いで【当然という思考】が多かった。

表6 学校アンケートに書く理由（5年生）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一部
【変化への期待】(32)	＜問題の解決＞(17)	悩みは解決したいから／一人で悩んでいたら、ずっと解決しないと思うから／それに書けば、悩みが消えると思ったから／何も解決せずに終わるのは悔しいし、嫌だから／自分で解決しようとしてもケンカになるかもしれないから／そのままだと困るから／その友達と仲直りしたいから
	＜不快感の解消＞(15)	先生に話したら気持ちが楽になるから／もし書かなかったら、自分の心の中にモヤモヤの気持ちが残るから／ストレスがたまると、ためこむのが嫌いだから／そのままにしていたら、困っているところがさらに大きくなって、自分が苦しくなるから
【当然という思考】(11)	＜当然という思考＞(11)	嫌なことがあったら、人に相談した方がよいと思っているから／先生に言った方がいいと思うから／真実を書いた方がいいと思うから／そのための生活アンケートだから／自分が嫌なことは、普通に相談できる／「先生に相談したら、解決する。」と思っている／アンケートに書いて相談するのがいいと思ったから
【アンケートのメリット】(2)	【アンケートのメリット】(2)	書くだけだから／相談するのが恥ずかしいし、人に話したくないから
【他者との共有】(2)	＜他者との共有＞(2)	一人で困るのが嫌だから／相談をしたいから

注：その他として、「書いているから」「書いたことがあるから」「特に書くことがないから」「あまり書かない」という記述があった。

表7のように、6年生の書く理由は、【変化への期待】（＜不快感の解消＞＜問題の解決＞）、【当然という思考】（＜当然という思考＞）、【他者との共有】（＜他者との共有＞）、【アンケートのメリット】（＜アンケートのメリット＞）に分類され、【変化への期待】の記述数が最も多く、次いで【当然という思考】が多かった。

表7 学校アンケートに書く理由（6年生）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一部
【変化への期待】 (29)	＜不快感の解消＞ (18)	嫌なことは早く終わらせたいから／書いた方が自分がスッキリするから／嫌な気持ちを心に抱えたままだとストレスとかになるからちゃんと書いた方がいい／書いた方が、悩みをさらけ出したみたいで気分がよくなると思うから／嫌なことや心残りは、書いた方が楽になるし、直接言葉というわけではないから
	＜問題の解決＞ (11)	できるだけ早く解決させたいから／悩み事があったら、解決したいから／アンケートに書くことで、悩みを解決できると思うから／書かなくてずっとその悩みを抱えるより、書いて解決する方がいいから／言わなくても、書くことによって少し解消されるから
【当然という思考】 (6)	＜当然という思考＞ (6)	よっぽどのがあれば書く／不安があったら書くことにしているから／いじめがあったりしたら書く／楽しく生活できるようにするためのアンケートだから／伝えた方がいいから
【他者との共有】 (6)	＜他者との共有＞ (6)	自分だけで悩んでいても解決しないから／悩みごとが大変で、大きなことだったら、自分一人では解決できないと思うから／先生とかと話す、一人で悩まないでいいから／誰かに相談してから解決したいから
【アンケートのメリット】 (1)	＜アンケートのメリット＞ (1)	休み時間、先生に話す暇がないから

注：その他として、「悩みごとがないから」という記述があった。

表8のように、4年生の書かない理由は、【他の手段の選択】（＜学校以外への相談＞＜自力での解決＞＜直接の相談＞）、【抵抗】（＜拒否＞＜躊躇＞）、【必要性のなさ】（＜必要性のなさ＞）、【懸念】（＜仕返し懸念＞＜拡大の懸念＞＜叱責の懸念＞）、【他者への配慮】（＜他者への配慮＞）、【期待のなさ】（＜期待のなさ＞）に分類され、【他の手段の選択】の記述数が最も多く、次いで【抵抗】【必要性のなさ】が多かった。

表8 学校アンケートに書かない理由（4年生）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一部
【他の手段の選択】 (18)	＜学校以外への相談＞ (10)	相談できる人がいるから／自分の身近な人にしか話したくないから／先生だったら私が伝えたいことが上手く伝わらないから／お母さんや友達に相談するから
	＜自力での解決＞ (6)	自分で解決できるならする／自分で頑張って解決したい
	＜直接の相談＞ (2)	直接先生に相談する
【抵抗】 (12)	＜拒否＞ (6)	人に聞かれないから／言いたくない／書きたくないから
	＜躊躇＞ (6)	恥ずかしい／自信がない／うまく相談できる気がしないから／言ったら自分が情けなく思える
【必要性のなさ】 (11)	＜必要性のなさ＞ (11)	書くことがないから／困ったり、悩んだりしていないから／あまり気にしないから／別に書かなくても仲直りをできているから
【懸念】 (10)	＜仕返し懸念＞ (3)	相談して、それが相手に伝わって嫌なことをされたら嫌だから／仕返しされるのがこわい
	＜拡大の懸念＞ (5)	みんなに広まるかもしれないから／あまりおおごとにしたくない／他の人を巻き込みたくない
	＜叱責の懸念＞ (2)	怒られそうで怖い
【他者への配慮】 (7)	＜他者への配慮＞ (7)	友達のことを言ったらその子も怒られるから／もし相手を傷つけたら嫌だから／先生を心配させたくないから
【期待のなさ】 (2)	＜期待のなさ＞ (2)	困らせている人は、言ってもすぐ直らない

注：その他として、「ない」「書いたことが1回しかないから」「思いつかない（その聞かれたことに対して）」「分かりません」という記述があった。

表9のように、5年生の書かない理由は、【他の手段の選択】（＜学校以外への相談＞＜自力での解決＞＜直接の相談＞）、【抵抗】（＜拒否＞＜躊躇＞）、【必要性のなさ】（＜必要性のなさ＞）、【懸念】（＜関係悪化の懸念＞＜周囲の反応への懸念＞）、【他者への配慮】（＜他者への配慮＞）、【期待のなさ】（＜期待のなさ＞）に分類され、【他の手段の選択】の記述数が最も多く、次いで【抵抗】【必要性のなさ】が多かった。

表10のように、6年生の書かない理由は、【他の手段の選択】（＜自力での解決＞＜学校以外への相談＞＜直接の相談＞）、【拒否】（＜拒否＞）、【必要性のなさ】（＜必要性のなさ＞）、【懸念】（＜拡大の懸念＞＜関係悪化の懸念＞＜周囲の反応への懸念＞）、【期待のなさ】（＜期待のなさ＞）、【他者への配慮】（＜他者への配慮＞）、【内容による書けなさ】（＜内容による書けなさ＞）に分類され、【他の手段の選択】の記述数が最も多く、次いで【拒否】【必要性のなさ】が多かった。

表9 学校アンケートに書かない理由（5年生）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一部
【他の手段の選択】 (23)	＜学校以外への相談＞ (9)	まず、家族に相談する／相談したいときは、お母さんに相談したいから／まず、1回家族に相談して、それでもダメだったらアンケートに書く
	＜自力での解決＞ (9)	できるだけ自分で解決しようとしているから／書かなくても自分の力で解決できる／人に頼らず、頼るときは先に自分で解決できるならして、できなかったら人に頼って相談する／自分のことだから自分で解決したい／自分と相手に話し合っただけで答えを出すことが大切だから
	＜直接の相談＞ (5)	できるだけはやく悩みを相談し、すっきりした気持ちになりたいから／アンケートに書くより、直接相談した方が早いだろうから／アンケートに書かず直接先生に言うから
【抵抗】 (17)	＜拒否＞ (15)	話すのがめんどくさい／言いたくないから／書く気にならない／担任の先生だから言いにくい／細かいところまでそんなに言いたくない／あったとしても言いにくい／もっとつらいことぐらいあるんだ、と流す／気にしたくないから
	＜躊躇＞ (2)	この程度のことで相談するのは情けないし／書く勇気がない
【必要性のなさ】 (16)	＜必要性のなさ＞ (16)	困ったり、悩んだりすることがあまりない／書く必要がないから／またされたら書くから／相手に謝らせたいとか、そういうものないから
【懸念】 (8)	＜関係悪化の懸念＞ (6)	友達のことだったら、その友達に嫌われるかもしれないから／嫌だと思って話し合いをしたら、仲が悪くなるから／気まずい／もしそれは勘違いとかだったら、なんか気まずい
	＜周囲の反応への懸念＞ (2)	他の人に聞かれたり、何か思われたら嫌だから
【他者への配慮】 (4)	＜他者への配慮＞ (4)	その友達が傷ついてしまったら嫌だから／もし書いて、先生が誰かと話したりしたらみんなも困るし、先生も困るから
【期待のなさ】 (2)	＜期待のなさ＞ (2)	解決しても、もやもやするから／自分の求めている答えや提案がないかもしれないから

注：その他として、「気分」「なんで書かないんだろうね」という記述があった。

表10 学校アンケートに書かない理由（6年生）

カテゴリー	サブカテゴリー	記述内容の一部
【他の手段の選択】 (26)	＜自力での解決＞ (12)	自分で解決するから／自分や友達と解決する／我慢できる／できるだけ自分で解決して、誰にも迷惑とか協力とかしてもらいたくないから／先生と一緒に解決するんじゃない、自分たちが起こした事は、自分たちで解決したいから／いきなり相談するのではなく、少し考えたいから
	＜学校以外への相談＞ (9)	友だちに相談するから／家の人に相談するから／親に相談できるから／自分の事を常に分かってくれているお母さん、お父さんの方、友達の方が信頼できるし、気軽に聞ける
	＜直接の相談＞ (5)	アンケートに書くより自分で信用できる人に口で話した方が安心できるから／書くなくてもいつでも相談できるから
【拒否】 (14)	＜拒否＞ (14)	困ったことをアンケートに書くのが嫌だから／話したくないから／書きたくないから／めんどくさいから／嫌な事は書きづらい／正直に言いにくいから／自分の悩みを身内ではない他人と共有したくないから
【必要のなさ】 (13)	＜必要のなさ＞ (13)	困ったり、悩んだりすることがない／別に先生に相談することでもないからだと思うから／嫌なことがあってもどうでもいいから／そのうち解決するから
【懸念】 (8)	＜拡大の懸念＞ (5)	おおごとになったら嫌だから／いじめをしている人に知られて、いじめがおさまらなかつたり、ひどくなつたりするのかなと思ったから／学校のうわさになりそうだから
	＜関係悪化の懸念＞ (2)	先生に言って、それで注意された人にいじめられたくないから／もっとその友達と気まずい関係になってしまうかもと思うから
	＜周囲の反応への懸念＞ (1)	書いたらめんどくさい人と思われそうだから
【期待のなさ】 (9)	＜期待のなさ＞ (9)	解決しないと思うし／書いてもどうにもならない／意味がないから／話しても悩みはなくなると思うから／先生と相談しても解決に向かわないと思っているから／解決できるか不安だから
【他者への配慮】 (3)	＜他者への配慮＞ (3)	たくさんの人に迷惑をかけるから／先生の時間を使うのは申し訳ないから／もしかしたら自分がいけないことをして相手を困らせたりしたかもしれないから
【内容による書けなさ】 (3)	＜内容による書けなさ＞ (3)	複雑なので書きにくい／学校では、関係がないから／内容が違う

注：その他として、「理由なし」という記述があった。

3. 考察

3-1 悩みの内容と相談相手

表1のように、1年生～3年生では、1、2年生は勉強の悩みが最も多く選択され、3年生も友人関係に次いで多く選択された。このことから、1年生～3年生では勉強について困ったり悩んだりする児童が一定数いると考えられ、低学年であったり、児童からの直接の訴えはなくとも、どの学年でも勉強について悩む可能性

があることを教職員や保護者は認識しておく必要があるだろう。また3年生以降、同年代の仲間関係が深まることが考えられるが、反面友達について困ったり悩んだりすることも増えることがうかがえる。そのため、中学年以降、一見仲良く見える関係においても、困ったり悩んだりする可能性があることを、教職員や保護者は理解する必要があるだろう。学研教育総合研究所（2023）の調査では、小学生1年生～6年生の悩みで多かったのは「学校での友だち関係」（15.8%）、「学習に関すること」（14.8%）であり、小学生は他の側面よりも勉強や友人関係において悩みを抱えやすい可能性が考えられる。

そして表2のように、相談相手はどの学年も圧倒的に母親が選択されることが示された。一方で父親は、母親よりは選択される割合は低く、学年によるばらつきがあるが、4割～6割の児童は選択していた。学研教育総合研究所（2023）の調査でも、小学校1年生～6年生の相談相手として、母親が最も多く（76.4%）、次いで父親（35.7%）となっている。小学生において、母親は身近に相談しやすい対象と捉えられていると考えられ、また母親ほどではないが、父親も相談する対象と捉えられることも少なくないと考えられた。

担任は学年が上がるにつれて選択される割合が少なくなっており、小学生にとって身近な大人である担任は、家族よりは学年が上がるほど相談しにくい対象となる可能性が考えられた。永井（2009）の小学校4年生～6年生を対象とした調査でも、教員への援助要請意図（相談すると思うか）は、学年が上がるにつれて低くなっていたことが報告されている。佐藤・渡邊（2013）は教員が小学生の援助要請を待っているだけでは教員への援助要請は生起しにくい可能性を指摘しているが、浅原・秋光（2017）は小学校5、6年生を対象とした調査から、個人に行う日々のあいさつや褒める行為、学級全体への声かけ・指導が、教員からの援助に対する抵抗感を下げ、それが援助をされたい気持ちに繋がる可能性を指摘している。学年が上がっても児童が教員に相談しやすくするためには、日常での細やかな声かけ等の関わりが重要と考えられる。

対象的に、友達は学年が上がるにつれて選択される割合が増えており、小学生では学年が上がるほど、友達は自分の困ったことや悩みを相談する対象となることがうかがえた。佐藤・渡邊（2013）の研究でも、小学校4年生～6年生は保護者に最も多く援助要請を行っているが、次に友達に援助要請を行っていることが報告されており、小学生では学年が上がるにつれ、友達が重要な相談相手になっていくことが考えられる。また、いずれの学年も「きょうだい」を2～3割の児童が選択し、「その他」として、祖父母やいとこ、親せきなどが書かれていた。川窪ら（2023）の小学校4年生～6年生対象の調査では、信頼できる大人として自由記述で記載されたのは、親に次いで、その他の家族・親戚（家族、きょうだい、祖父母、叔父・叔母）が多かった。児童にとってきょうだいや祖父母なども、身近で頼れる場合があると考えられる。そして、「誰にも話さない」を選択する児童も1割～2割いることが示され、困っても話さない児童がいることを、児童に関わる大人は理解しておく必要があると考えられる。

3-2 学校アンケートへの記載の有無

表3のように、児童の悩みを把握するために実施する学校アンケートに、低学年は5割～6割の児童が「書く」を選択していたが、3年生以降は学年が上がるにつれてその割合は低くなり、6年生は3割となった。一方で「書かない」を選択した児童は、低学年は3割～4割であり、3年生以降は5割～6割となった。これらから、児童の悩みを把握するための学校のアンケートは、学年が低いほど記述し、学年が上がるほど記述しなくなる可能性が考えられた。しかしながら、低学年でも「書く」の選択率は5割～6割であり、学校のアンケートのみで、児童の悩みなどを把握することは困難な可能性があると考えられる。そのため、アンケートだけでなく、日頃の関わりや面談、保護者や他の教員との情報共有等、複数の方法を用いて児童を理解する必要があると考えられる。

3-3 学校アンケートに書かない理由・書く理由

1) 1年生～3年生の書かない理由：表4のように、「困ったことがない」が最も多く選択されていたが、表3で「書かない」を選択した割合よりも少ない。悩みや困ったことがなく学校のアンケートに書かない場合もあるが、全てではないことがうかがえる。そして、1年生の書かない理由でも、友達から見られることを避けたかったり、恥ずかしいといった隠したい気持ちがあったり、書いても困ったことがなくならないという諦めの気持ちもあることが示された。一方で、自分で解決するといった積極的な理由も見られ、小学校1年生においてもアンケートに書かない背景はネガティブな場合もポジティブな場合も両方あると考えられた。また、1年生や2年生では、先生にすぐに伝えるためにアンケートに書いていない児童も1割～2割いる

ことが示され、アンケートという手段だけでなく、直接伝えるなど、様々な解決方法を児童が選択していることが推測された。3年生では、恥ずかしさからや、友達のことが気になり書いていない場合が1割あること、逆に自分で解決することを理由とした児童も1割いることが示され、3年生が学校のアンケートに書かない背景も1年生同様、ネガティブな場合もポジティブな場合もあると考えられた。

2) 4年生～6年生の書く理由：表5～表7から、4年生～6年生のどの学年でも、問題が解決したり、不快な感情が解消するなど、書くことで得られる効果を期待してアンケートに書く児童が最も多いことが考えられる。また、4年生と6年生ではアンケートを書くことで他者と共有して解決したいと考えている児童がいることが示された。そのため、アンケートに記載があった場合は、すぐに児童から話を聞くなど、実際に速やかに対処することが必要と考えられる。さらに、4年生～6年生では書くことが当然と考える児童もいることが示された。このように、困ったり悩んだりした時は相談することは当然であるという意識を児童が持つことができるように、日頃から相談することは当然であるということを繰り返し伝えることも、児童が必要な場合に相談することができるために有益と考えられる。

3) 4年生～6年生の書かない理由：表8～表10から、4年生～6年生のどの学年でも、教員以外の他者に相談したり、自分で解決したいと考えたり、アンケートに書くのではなく直接教員に伝えるという記述が最も多く、アンケートには書かないが解決しようとする児童も少なくないと考えられた。一方で、4年生～6年生のどの学年でも、アンケートに書くことへの抵抗や拒否、書くことでの仕返しや関係悪化、解決しないだろうという諦めについての記述も少なくなかった。このように、困ったり悩んでもアンケートに書かない背景として、アンケートに書くことの難しさや、書くことがネガティブな結果に繋がることを予想する場合もあると考えられる。そして、他者を配慮して書かない場合もあることが示された。これらのことから、実際にアンケートに書くことのようなポジティブな結果が得られるかを具体的に説明したり、他者への影響の懸念を払拭するような説明をすることも必要ではないかと考えられる。

おわりに

今回の結果から、低学年から悩みがあること、どの学年も学校でのアンケートに書く理由と書かない理由には、ポジティブなものやネガティブなものや、他者を配慮したものもあることが明らかとなった。ネガティブな理由からや、他者に気をつかって、書きたいが書くことをためらうことを減らすためには、アンケートを実施するだけでなく、書いた後に具体的にどのように対応がなされるかを説明するなど、児童に安心感を与える取り組みを行うことも必要と考えられる。

一方で児童は相談相手として、親や教員、友人以外にも、祖父母やいとこ、習い事の先生など多様な相談相手を想定していることが明らかになった。アンケートを実施することも有益であるが、アンケートも含め、児童が学齢期を過ぎても悩みや困難に対処できる力を養うために、様々な相談相手や相談方法があることを知ったり、自分で問題を解決する力を身につけるように支えることも必要と考えられる。

付記

本研究は第2著者が行った調査の一部をもとに作成した。本研究の調査にあたり、ご協力いただいた当該学校の校長先生をはじめ、先生方や児童の皆さんに心より感謝申し上げます。

引用文献

- 安藤香織（2004）：図式を利用する KJ 法 無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サツオタツヤ（編）質的心理学 新曜社 pp.192-198.
- 浅原修一・秋光恵子（2017）：教師の指導行動が小学生の援助要請に対する意識に及ぼす影響，日本教育心理学会総会発表論文集，59，743.
- 学研教育総合研究所（2023）：小学生白書 Web 版 2023 年 10 月調査
<https://www.gakken.jp/kyouikusunken/whitepaper/202310/index.html>（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）
- 内閣府（2023）：こども・若者の意識と生活に関する調査（令和 4 年度）

- <https://warp.da.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/12772297/www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r04/pdf-index.html>（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）
- 川喜田二郎（2017）：発想法 創造性開発のために 改版 中公新書
- 川窪貴代・小川将・高橋知也・松永博子・山内美紗子・小林桃子・佐藤研一郎・藤原佳典・鈴木宏幸（2023）：日本健康心理学会大会発表論文集，**36**，21.
- 菊池亜矢子・山本奨（2021）：小学生の援助要請行動を阻害する要因の探索とその測定尺度作成の試み，日本教育心理学会総会発表論文集，**63**，478.
- 本田真大・永井智（2024）：児童期の援助要請研究に関するスコーピングレビューー 2002～2021 年の研究動向ー，*カウンセリング研究*，**57**(1)，27-40.
- 茨城県教育研修センター（2001）：教育相談に関する研究 予防的な学校教育相談の在り方，研究報告書第 44 号 <https://www2.center.ibk.ed.jp/contents/kenkyuu/houkoku/data/044/index.htm>（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）
- 文部科学省（2015）：平成 26 年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」における「いじめ」に関する調査結果について
https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/10/_icsFiles/afieldfile/2015/11/06/1363297_01_1.pdf（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）
- 文部科学省（2023）令和 4 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について
https://www.mext.go.jp/content/20231004-mxt_jidou01-100002753_1.pdf（最終閲覧日 2024 年 10 月 10 日）
- 永井智（2009）：小学生における援助要請意図ー学校生活満足度、悩みの経験、抑うつとの関連ー，*学校心理学研究*，**9**(1)，7-24.
- 西尾祐美子（2024）：思春期の申請に関する研究ー親から友人への変化していく関係性に焦点を当ててー，*神戸大学発達・臨床心理学研究*，**14**，29-35.
- 佐藤美和・渡邊正樹（2013）：小学生の悩みとそれに対する援助要請行動の実態，*東京学芸大学紀要 芸術・スポーツ科学系*，**65**，181-190.
- 鈴木千晴・中山満子（2020）：小学生におけるネットを通じた見知らぬ人との関わりの実態ー SNS 利用と援助要請、孤独感との関連性の検討ー，*日本心理学会大会発表論文集*，**84**，34.